

心の裏側

今日 あした

部屋の隅に置かれた姿見には、庭で乳母車に赤子を乗せてあやしている女の姿が写っている。

長い髪を後ろで一つに束ねたその女は乳母車を押す手を止めて、向かい合わせの位置にいる赤子に向かって、何か話しかけるような仕草をしている。

鏡に写っている赤子は、はっきりとは見えないが両手を前に伸ばして抱っこをせがんでいるようだ。だが、とうとう泣き出した。

鏡に写るそんな光景を見ていたみのりの目から涙があふれた。泣くつもりはなかったのに、後から後から溢れ出て来る。

「あなた」

広い部屋の庭に面した縁側に置いてある小さなテーブルいっばいに新聞を広げて籐椅子に腰かけ、上半身を前のめりにしている夫の柰次は、その声が聞こえているはずなのに、新聞から目をあげようとしなない。

「あなた」

みのりはもう一度声をかけた。

「なんだい」

夫は、こめかみから顎までぐるりときれいに切りそろえた顎髭のある顔を、幾分うるさそうにもたげた。

「ここじゃなくて、他の部屋に替わってはいけないかしら」

「部屋を替わる？ だって、昨日の部屋は気に入らないからって、替わったばかりじゃないか」

夫婦は、五月の大型連休の間はここに居るつもりで温泉旅館に来ている。

「前の部屋なら替わったばかりだからまだ空いているのじゃないかしら、ねえあなた、いいでしょう……」

「だが、前の部屋よりこのの方が広いし、居心地も良いじゃないか、みのりだつて前の部屋は日が当たらないし、景色も裏の雑木林しか見えないから、もうこの部屋に居るのは嫌だと言って変えてもらったのじゃないのか、何が気に入らないのだい」

「何がって事も無いのだけど……だめ？」

夫は、良いも悪いも応えず新聞に目を戻した。

ここは岩手県にある網張温泉である。みのりの実家が盛岡にあるので、五月の連休に実家にちよつと顔を出してから、ここ網張温泉に来ている。

「少し外の空気を吸ってくるわ」

そう言うみのりの目からまた涙がつーつと流れた。

「何だ、泣いているのか？」

そう言うと、柰次は、みのりの見ている視線の先に目をやった。

「ああ、赤ん坊か」

冬場はスキー場になる広々とした庭は、下草が生えているだけで見晴らしがよく、遠く駒ヶ岳が見える。その雄大な景色の中に赤ん坊と、乳母車に手をかけてあやしている若い女だけが動くものだった。

「嫌なら引き払って東京に帰っても良いし、盛岡のお袋さんの所に行っても良いんだよ」

「いいえ、せつかく来たのだから……」

みのりはそう言うと、憑かれたように外に出て行った。

やがて、縁側の籐椅子に腰かけている柰次の視界にみのりの姿が映った。

赤ん坊は、まだぐずっている。

「まあ、可愛らしい赤ちゃんですこと、坊ちゃんですか？」

赤ん坊はふいに声を掛けられて、泣き止むと、目も口もぼかんと開けてみのを凝視している。

「はい、男の子です。大声で泣いて……」女は申し訳なさそうに下を向いた。

「坊ちゃんは何時お生まれになりましたの？」

「はあ、あのお、お正月に……」女は、そう言ったが、最後の方は言葉が消えかかっている。

「ああ、わたくしは、山内みのと申しまして、この連休でこちらに湯治に来ておりますの、ほら、あのお部屋です」と、今までの部屋を指さした。

みのりは、少し前までは赤ん坊の泣き声を聞くのも堪えられなかったのに、今ではこの赤子に興味を引かれている。赤子の側にいるだけで苦しみを新たにするのはわかっているのに、どこかでマゾヒスティックにもつと傷つきたいと思っている。そして自分の傷口を開いてまでも、一時の病的な快を食るように、

赤子を見ている。

女は、怪訝な様子でためらいがちにもう一度、

「このお正月の生まれでございませう」と言い、声を落として、

「お宅ではとんだ事でございましたってねえ」と付け加えた。

エッ、どうしてこの女が知っているのだろうか？ という疑問がみのりの頭をよぎった。それなのに、みのりは思わずうるんでしまった目の中に無理をして微笑みを漂わせて

「ええ、肺炎になりましたね、あつという間の出来事でございましたのよ」と応えた。

「先月の初めに、この旅館にお泊りになった時にいけなくなったと、旅館の方から聞きました。ちょうどこの子と同じくらいの坊ちゃんだったそうで……。何と申し上げていいかわかりません。私なんかそんな目に遭ったら、と思うだけはどうしたらよいかと思ってしまうすわ」

女の目にはいつの間にか、かすかに涙が光っている。

「一時は随分悲しかったのですが、——もうあきらめてしまいましたわ」

二人の母親は、再び愚図り出した赤子を間に寂しそうに目を見交わした。

「ちよっと抱かせて頂いてもよろしいでしょうか」、みのりが遠慮がちに言う
と、

「ええ、どうぞ抱いてやってください」

女はそう言って、乳母車から赤ん坊を抱きあげてみのりの腕に託した。

「まあ、可愛らしいこと」

抱きとった赤子から乳の臭いが強くした。途端にみのりの乳が痛いほどに張って来た。

「お乳は充分に足りているのですか」みのりは聞かずにはいらなかった。

「ええ、今のところは充分に出ています。できれば母乳だけで育てたいと思っ
ているのですよ」

「そうですか、それが一番ですものね」

みのりは、やっとそれだけを言うと赤子を乳母車に戻して、先ほどからこちらを見ている夫の方を指して、

「主人ですの、私の実家が盛岡にありますのでこちらには度々来るのですよ。」

主人が待っているのでお先に失礼しますね」

みのりは、下着を濡らしているお乳が漏れ出すのではないかと気がかりになり急ぎ足で部屋に向かった。

子供が亡くなったのは、一か月前のことだった。

一月に東京で生まれた亮は、生まれた時は三千五百グラムもある健康な男の子だった。三か月目には、何にでも興味を持ち「あーあ」とか「ぶー」とか音を発しながら触れてみたり、舐めて見たり……。二人が晩婚だったこともあり、三十過ぎの夫婦は奮発して、郊外に新築三DKの小さいながら庭付きの家も手に入れ、柰次もみのりも幸福の絶頂だった。

そんな時に、柰次の中国への海外転勤が決まった。

二人で散々相談して、新聞記者という職業柄、家を空けることが多い柰次が単身赴任をし、亮が一歳になるまでは、みのりが東京と盛岡の実家を行ったり来たりしながら亮を育てることにした。

柰次が中国に立つ前に、生活設計に合わせた物の移動を兼ねて盛岡に行き、親子三人でしばしの別れを惜しんで綱張温泉に行ったのだった。亮は引越しの前から風邪をひいて元気が無かった。だが熱はほとんどなく、おとなしいのを幸いにみのりは忙しきにかまけていた。

旅館に着いて、一休みをしてから亮を抱っこして温泉に浸かった。部屋に戻ると、亮がぐったりしている。持ってきた体温計で計ってみたら三十八度も熱がある。びっくりしてすぐに医者に来てもらった。

「肺炎の疑いがあるので、雫石の設備の整った大きな病院に連れて行きますよ」と言われ、救急車を手配してもらって雫石の中央病院に行った。

その夜、零時三十分に、亮の命の炎が消えてしまった。わずか生後四か月と十二日で……。

夕食は食堂でとることになっている。

「気が進まないのなら部屋に持ってきてもらえるのじゃないかな」

「いいわよ、気分が変わるから食堂に行きましょう」

みのりが先に立って食堂に行った。前庭には満開の桜が見事に咲き、箱庭のような日本庭園をしつらえた庭と共にライトアップされている。

「ほら、灯籠に火なんか灯ってなかなか風流じゃないか」。柰次が皮肉な調子で言ってみのを笑わせる。

「部屋から見える雄大な景色と全然違うわね」

「昨日の部屋に戻ろうなんて、言わないでくれよ」

柰次が発する情けない声にみのりが笑う。

「先ほどはどうも……」

みのりが急に入り口の方を向いて、愛想の良い声を発した。

庭の方に向かって座っている柰次が振り向いた。

赤子を抱っこした女がニコニコ笑いながらこちらに向かって来た。隣の席が空いているのでその席を勧めようとしたら、柰次が横から

「あれ、お一人ですか」と聞いた。

女は、軽く会釈をしたので、みのりが、

「主人ですの」と紹介すると、女は柰次の方を向いて深く頭を下げて、

「主人は後から来ます」と言い、座るのをためらって入り口の方に帰って行った。

「座らないのかな」

「あなた、迷惑そうな顔をしていたわよ」みのりが言うと、

「刺激が強すぎるからな、ご遠慮願いたいよ」と小声で応えた。

赤子を抱っこした女は、太った若い男が食堂に入ってきて来ると、二人で赤ん坊の顔を覗き込んで満足げに顔を見合わせ、幼児用の椅子が置かれた席に腰を落ち着けた。初めから用意されていたのだ。

「なんだ、指定席があったのね、良かったわね、あなた」

みのりはふざけながらそうは言ったが、再び乳が張って来た。不思議なこと
に亮が死んですぐに乳は止まってしまったはずなのに、どうしたのだろう。広い
食堂は連休でほとんどのテーブルが埋まっている。音量を抑えてはいるがク
ラシック音楽も流れている。それなのに、赤ん坊の気配だけがみのりを刺激す
る。

「あの赤ちゃんに、私のこのおっぱいを飲ませたらどんなにすっきりするだろ
う」みのりは無意識につぶやいていた。

「あぶない、あぶない。そんな事言うなよ」。

「赤ちゃんの声を聞いただけでおっぱいが痛いほど張って来る女の気持ちなん
て、貴方には解らないのよ」

「女体の秘密ってわけか」

「いやらしい！」

「みのりも一口どうだい」柰次がビールを勧める。

「いいわよ」みのりはアルコールを受け付けられない体質のようで、少し飲んだ
だけで気持ちが悪くなる。

亮が生きていたら……。一日に何度思ったら気が済むのだろう、みのりは

その気持ちを又、胸の内に納めた。

五月の連休は当初の予定通り、目いっぱい温泉で過ごした。

赤子を連れた女は二泊して帰って行った。盛岡市内に住んでいるようで、「また、お会い出来ますね。息子の清に良くして下さってありがとうございます。亮君と同じ月に生まれたのも何かのご縁なのでしょうね。亮君だと思って会ってやってく下さい」。

別れにそう言っていた。悪意なんか一つもない親切なだけの言葉だった。

連休が終わってから、李次の仕事の都合で、少し早いが亮の四十九日の法要を済ませ、東京にある山内家の墓に納骨した。

「みのは中国に行く準備はもう万端だろう」。

李次は、今回は長めの休みを取り、みのを連れて中国に帰るつもりで来ている。だがみのはいつまでも踏ん切りがつかない。

家は、家具を置いたまま知人に貸すつもりで、他の荷物はトランクルームに預けた。亮の物は処分することが出来ず、泣きながら梱包した。だが思い出を消し去ることは出来ない。おっぱいを無心に飲んでいる口元、離乳をさせる為に振って見せたガラガラ。「マンマ、マンマ」と小さな手のひらを開いたり閉じたりする仕草、靴下に収まっていた小さな足。脈絡もなく脳裏に出現する度に胸を詰まらせる。

「中国に行ったら、珍しいものばかりで気分も変わるんじゃないか。明日は羽田を発てるのだろう。」

おい、みのり宛の手紙がサイドボードに置いてあるけど、忘れてるのじゃないか
「あ、忘れていたわ」

みのりはそう言って、きれいな水色の封筒を手に取った。

「これは、連休の時網張温泉で会った赤ちゃんを連れた女からの手紙なのよ」

「へー、手紙のやり取りをしているのかい」

「ええ、一度だけ、あの赤ちゃん、清君っていうの、写真を貰ったわ。亮と同じ月に生まれたのも何かの縁だからって……ご親切な方なのよ。でも、見たら、気落ちがしてしまって、亮じゃあない赤子の写真なんか見るんじゃないかって、それでもお礼状はちゃんと出したのよ、傷ついていないふりなんかして……」

「嫌ならそう書いて出せばいいじゃないか。もう日本を離れるんだ、手紙は読まないで捨てても良いけど、もう出さないように書き送るんだな」

みのは青い封筒を手にとってペーパーナイフで封を切った。手紙は封筒と同じ薄いブルーの紙に白い百合の花がうつすらとグレーとの濃淡で描かれている。

そこに、右上がりの几帳面な文字で「清が死にました」と書いてあった。

「あら、赤ちゃん、死んだんですって」

みのは頓狂な声を上げた。

「何の赤ちゃんだい」

「ほら、網張温泉で会ったあの子よ」

「ええっ、ついこの前に会ったあの子か？それは気の毒だな」

「あんなに元気そうな子だったのにね」

「何で死んだのだい」

「やっぱり風邪ですって。」

「熱も高くないので、すぐに治るだろうと簡単に考えておりましたところ」

みのは興奮気味に手紙を読み始めた。

「「病院に入れた時には、もう手遅れでございました」

ねえ、亮の時と同じだわね。

「注射をしたり、酸素吸入をしたりと、医者は手を尽くしてくれましたが、泣き声も次第に弱り、その夜十一時に息を引き取りました。その時の私の気持ち、どうぞお察し下さりたく……」

みのは、読みながら自然に微笑みがこぼれ出る。

「気の毒だな」。李次は、亮の命の瀬戸際の必死だったさまを思い出しながら、今見せている、妻の微笑、幸せそうな微笑を不快に思い、

「笑うなよ、あの赤子の母親に済まないじゃないか、子供が死んだというのに」

強い口調でそう言った。

「えッ、私、笑っていた？」

みのは自分でも驚いたが、急に胸が詰まって、李次を睨みつけた。

みのりの目から涙が流れた。

「私、あの赤ちゃんが亡くなったのが嬉しいのかわ……」

あの母親は……それは気の毒だとは思うけど、でも私、きっと嬉しいのよ。喜んではいけないの、ねえ、あなた」

興奮してそう言いながら、みのは身体じゅうに力が充ちて来るのを感じた。

了